

20

## 明治34年(1901)の医師・薬剤師調査と 工藤鉄男編『日本東京医事通覧』

樋口 輝雄

日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

明治6年(1873)、新政府は「医制」策定の資料として医術開業者たちの姓名、生年月日、修学履歴、専門科目名等を提出させるよう各府県庁に達した。ついで明治16年(1883)には全国的な医籍の統一に着手する。翌17年1月1日時点の医師現況調査を行い、それまでに所持していた旧免許を返納させて審査の上、内務省の医籍原簿に登録して菊花印章入りの新免許を下付した。

それから28年後の明治34年(1901)、医師や薬剤師の動態調査とその名簿を各地方庁、郡市区役所、町村役場に常備するため、「医籍薬剤師名簿編成並加除訂正規程」を内務省令により定めた。同規程は34年6月7日付官報に掲載されているが、その実施要綱は詳細を極め、7月31日現在の現況を調査票に記入させて8月31日までに返送するよう指示した。規程の中では「医師薬剤師現在調査票」の記入例を掲出し、(1) 氏名、(2) 住所、(3) 本籍に続き、(6) 医師・歯科医師・口中科・整骨科・薬剤師の種別、(7) 試験及第・学校卒業・奉職履歴・従来開業等の「免許ヲ得タル事由」など全9項目にわたる調査事項が示されている。各人毎の個票を用いた現況調査であったため、『医制八十年史』掲載の付表では、明治33年に40,924名であった医師数(歯科医を含む)が、翌34年では33,508名と調査前年より7,400名余減少した。

この全国調査とも並行して同年11月には、工藤鉄男により『日本東京医事通覧』(以下「医事通覧」)が編纂された。演者は同書を実見してはいないが、国立国会図書館所蔵のマイクロフィッシュからの複製物を本報告の資料とした。国会図書館の書誌情報によれば、形態は847p, 18cmで、現在は同館「近代デジタルライブラリー」からも閲覧複写することができる。全体の構成は医事衛生法令、官庁医事衛生機関、(附録)衛生組合、医籍(附)薬剤師、学校、学会、衛生会、病院、医院、看護婦会、生命保険・薬品製造会社で、「医籍(附)薬剤師」欄が118頁を占める。

『医事通覧』は、巻頭に公爵近衛篤磨の書を掲げ、石黒忠恵、長谷川泰、北里柴三郎、鈴木萬次郎、金杉英五郎、川上元治郎、遠山椿吉、血脇守之助が序文を寄せている。自序では、明治30年(1897)に編纂が企図されたことを記し、凡例では「医籍の調査は本書編纂に付きて尤も苦心せる所にして我政府に於ても明治十七年以来殆んど医籍の整理に困じて放棄し従つて正確なる材料を期する能はず」と述べている。そして、医師と薬剤師名簿は当初、警視庁と各警察署の原簿を基に作成していたが、内務省が医籍調査を実施したことで、府郡区役所の名簿とも対比参照して「その疑しき者は編輯員自から個人に就いて調べた」とも記している。

「医籍」欄には東京府内の15区6郡と島嶼の医師、歯科医、整骨科医師、薬剤師の氏名、免許種別、登録年月、族籍、生年月、住所と電話番号が各区郡別氏名イロハ順で掲載されている。免許種別では明治16年までの内務省免許による奉職履歴医も「従来」と表記され、府県庁から仮免許を下付されていた所謂「従来開業医師」とは区別されておらず、氏名の重複も一部見受けられるが、現在の医籍録の原型とも言えよう。この後、編者の工藤鉄男は明治42年には全国版の『日本杏林要覧』を出版した。

なお、『医事通覧』医籍欄に掲載されている人名を集計すると、医師2,275名、歯科医116名、整骨科7名、薬剤師395名であった。薬剤師では京橋区出雲町に資生堂の福原有信、下谷区池ノ端に宝丹の守田治兵衛の名がある。医師の中で最高齢は、京橋区築地の梯民也で文政3年(1820)6月生、このとき82歳、また整骨科の7名は麴町区に1名、日本橋区に1名、神田区に5名で、神田区末広の宮本ハナは天保14年1月生、明治26年に三多摩が東京府に編入されるまで、女性では東京府唯一の従来開業医師であったと思われる。